

圏外のアンテナ

[なんなら]の巻

「昨日あんまり寝てないんだ。なんなら、一睡もしてない」と、仕事仲間のMちゃんが言った。

なんなら？ ん？ と、耳をそばだてるわたし。

このような「なんなら」の使い方、最近よく聞くけど、なじめないのよねえ〜と思ったからである。

おそらく、「ヘタすると」とか「もうちょっと言うと」とかの意味で使っているのだろうけど、わたしのオツムは違和感でいっぱい。気になって話に集中できない。

そもそも「なんなら」は昔からある言葉である。

昔ながらのオーソドックスな使い方はというと……。

「急な雨だね。ビニール傘を貸すよ。なんなら、返さなくてもいいよ」

こんな感じ。なじみのあるこの使い方の「なんなら」には思いやりが隠されている。「返すのが面倒なら」と相手を思いやる。つまり、愛なのだ。

だが、最近の使い方はかなり違う。

例えば、先日、友人からSNSに届いたメッセージにも、新しい使い方の「なんなら」があった。

「小学一年生の授業はゆっくり進む。なんなら、外に春の草花を探しに行く時間さえある」……こんな感じである。

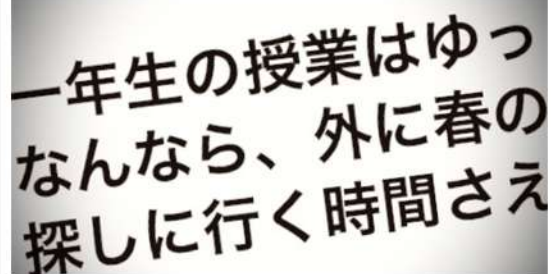
言うまでもないことだが、言葉は時代を映す鏡だと思う。コロコロ自在に変化する。だから、できるだけ拒絶したくない。受け入れたい。だが正直、新しい用法にはなかなか慣れない。なじめない……。

てなことばかり言っても仕方がないので、思い切って、わたしも新しい使い方にトライ。

「今回のコラムは手間取った。なんなら、完成するまでに3日もかかった」

たぶんこれでOKだと思う。でも、ちょっと自信なし！

=2022年6月24日掲載=



一年生の授業はゆっくり進む。
なんなら、外に春の
草花を探しに行く時間さえ